

阪口博士を悼む

神戸大学名誉教授 小林 哲 夫

阪口さんの訃報が神戸大学管理会計研究会のeメールネットを通じて私のもとに入ったのは、2012年3月22日でした。まだ60歳代の半ばにも達していないのに、こんなに早く天国へ旅立たれるとは思ってもやらないことでした。数年前、阪口さんに電話をかけ、関西に戻ってくる気はないかと尋ねたとき、停年になるまで少し時間があり、広島に残りたい気持ちが強いというご返事でした。亡くなられた後お聞きしたところ、広島大学で勤務を終えるのにはあと1年ほど時間が残されていて、親交があったドイツの研究者とも連絡を取って研究をさらに深めたいという計画あったようでしたが、阪口さんにとっても非常に残念だったと思います。

阪口さんと私は、共に神戸大学の溝口一雄先生のゼミで学び、10年ばかり年齢差はありますが、溝口門下の兄弟弟子の関係にあります。また、以前は私もドイツで在外研究を行い、原価理論や原価計算論を中心にドイツの経営経済学から多くのことを学びましたが、阪口さんも数回にわたってドイツを訪問され、同じ領域で研究を積み重ねられましたので、その面でも親しい仲間でした。

阪口さんが最初に長期在外研究ためドイツ等を訪問されたのは1977年で、溝口先生と共に日本学術振興会の国際共同研究員としてゲッチンゲン大学で研究を行われました。また1985年7月から1986年9月までの間、アレキサンダー・フォン・フンボルト財団の奨学研究員として同じ大学で研究を行われましたが、前回同様、受入研究者は同大学のリュッケ教授でした。私もリュッケ教授と親交があり、その後二人でリュッケ教授を訪問し、ご近所の大邸宅のお庭でびっくりするようごちそうを一緒に頂いたのは、今でも楽しい思い出です。1989年には、阪口さんは、文部省在学研究員としてチュービンゲン大学に赴かれ、シュバイツァー教授の下でさらに原価計算の研究を続けられました。阪口さんは、それ以前に1978年に同教授の名著『原価計算システム』の翻訳を出されています。1989年に阪口さんがチュービンゲン大学におられた頃、私は、他の日本の研究者と共にシュバイツァー教授編著の『一般経営経済学』の日本版を出すことを同教授から打診を受けていました。これは結構難題が多くて、同教授と会って意見を交換する必要があったのですが、チュービンゲン大学での意見交換の席には阪口さんにも参加していただきました。おかげで、この会合はうまくいき、この書も無事日本で出版され、阪口さんも共同執筆者として参加してくれました。阪口さんは、ドイツ語をととても流暢に話せるだけでなく、冷静に客観的に状況を判断し、しかも心情はとても温かい人でしたが、ドイツ人達もこのお人柄を高くリスペクトしていました。これがシュバイツァー教授との意見交換にも反映され、私はすごく助かりました。

阪口さんは、主にドイツの原価計算の展開を研究されてきました。ご研究の一部は最初に阪口さんの著書『部分原価計算序説』（税務経理協会、1984年）に示され、その後主著『ドイツ原価計算システム』（税務経理協会、1992年）でそれに大幅に手を加えられてより完全なものとしてされています。ドイツにおける原価計算論の展開については既に何人かの日本人研究者が論じていますが、阪口さんは、ドイツ固有の部分原価思考の源流をシュマーレンバッハに求められ、それについて詳しく論じられた後、ルンメル、メロヴィッツ、アクテ、プラウト、キルガー、ム＝ヴィレ、さらに最近では、リーベル、ラスマンなどの新しい原価計算論の潮流を取り上げておられます。それは、単なる紹介ではなく、批判的な考察を随所に加えたものであって、ドイツ人達の中にもある混乱を是正し、いくつかの有望な研究の流れから新たな理論展開の方向を明確に浮かび上がらせています。さらに、これらの著書では、原価計算の実践にも立ち入って、実証的、実践的な研究にも目を向けておられます。

最近、ドイツの原価計算理論や原価計算論について勉強する研究者が少なくなっていて、私は、阪口さんこそがドイツの原価計算論あるいは経営経済学の研究のリーダーとなると期待していました。実際

に、阪口さんの研究は、これからの若手研究者に対して明確な問題提起と研究の展開の手がかりを与えるものであって、誰かが阪口さんの後を継いで理論と実践の展開をしてほしいと願っています。

阪口さんは、最近は大学行政の面でも色々な課題に取り組んでおられたと聞いていますが、そのために気苦労も多かったと推察しています。私もその一人ですが、奥様の洋子さんも一緒に若いときからテニスやその他で楽しい時間を過ごしてきた仲間であり、業務から開放されたらまたゆっくりとお会いしたいと思っていました。その機会がなくなったのはとても残念ですが、お二人のお子様も立派に第一線でご活躍され、お弟子さん達も頑張っておられますので、天国から我々を見守っててください。心からご冥福をお祈り申し上げます。